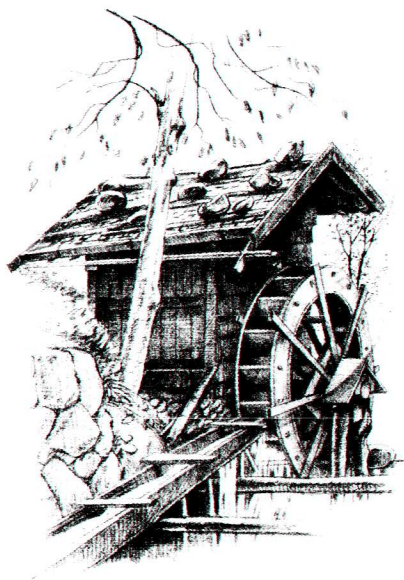


冥府の月 水上勉

六府の月

水上勉



筑摩書房

冥府の月

昭和四十八年十月十五日初版第一刷発行
昭和四十八年十一月二十日初版第二刷発行

著者 水上 勉

発行者 井上達三

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二一八
電話二九一七六五一 郵便番号
一〇一一九一 振替東京四一二三
印刷 晄印刷 製本 和田製本

装画 佐藤 章

◎ 水上勉 一九七三
〇〇九三一八〇〇九七一四六〇四

冥府の月

藁ぶき屋根だが南づらだけ三角穴をあけて入母家につくり、北は切妻ですませ、東西軒下三尺からうじて歩けるぐらいの廂が出ていた。止め竹も結え縄も、煤けて黒光りしているの、ふき流しの裏は極木をうちつけたようだった。間ぐちは四間奥ゆきははつきりせぬが五間ぐらいあったかもしれぬ。戸口に一間はぼの土盛りがあつて、杉戸のはまった敷居、そこをあげるとすぐ土間で、これも一間そこそこで上りはなになった。仕切りの障子をへだてた一段高い板間には、炉が切つてあつて、ぐるりに莚がしかれ、奥に六畳、そのよこが三畳の納戸、板間右手前に、四畳くらの寢所、といっても、ここも莚敷きで、一方は入口の戸袋が壁がわりで、ひき戸がおさまるたびに床はゆれた。内便所も風呂もなかった。谷から軒下へくぐってくる川に、「かわど」とよぶ降り段のつ

いた石積みの洗い場があった。そこで米も洗い、洗濯もした。だが、干天時はよく涸れたので、谷下の隣家まで手桶をさげて貰い水に行った。風呂も部落の上かみん町じょにあった母の里まで、村なか三丁ばかり歩いて貰いにいったが、それとて冬場だけのことで、春夏は「かわど」の水浴で、親も子も真裸かになって洗った。

北側の谷は、切妻の軒に迫る山の瀬でどんづまりになっている。西側はかわどの向うで高くなっている。ここは他人の持ち物の孟宗藪なので、葉洩れ陽はさしても、めったに陽はみえず、そのため西側屋根だけ、いたどりだの、たんぽぽだののまじったぺんぺん草が生え、青絨緞でもしいたみたいに、苔が軒先一寸ばかりずり落ちていた。東屋根はそれほどなくて、昼ちかくまで陽は入ったが、やはり他人の持ち物の小舎が建っていて、向うは埋葬地の丘がもりあがるので見通しはきかなかった。つまり一日じゅう暗かったわけだが、私の生れた頃から電燈はなかった。谷奥の一軒家なので、五本の電柱が要ったとか。工事の際に、電柱代は会社と折半だときいて、祖父が木挽きに明りはいらぬと

ことわった。その祖父の死後、大工をなりわいとした父も、仕事は施主の家でするから、ぜいたくとのこと、私が知るところでは大正八年三月から、昭和二十年の太平洋戦争の終結時まで約二十五年間ランプだった。そのランプも一つしかなかったもので、部屋から土間まで針金をわたして、食事時は居間へ、夜仕事の時は土間へ、必要に応じてうごかす仕組みで、うごかすたびに卵色の燈心をゆらめかす火屋が、ヴァイオリンのG線をふるわせるみたいな音をたてた。油代を惜しんだ母は、日が暮れたら寝て、陽が出たら起きい、としつけたが、その日暮れは谷の奥だから、村じゅう六十三戸のどこよりも早く来て、菩提寺の鐘が鳴らぬまに暗くなった。

障子が明るくなって眼がさめると、すぐ起きて高台の道をみたが、けこあんのさんまい谷に葬式花がゆれている。けこあんとは、むかしそこに景光庵という尼寺があつた名残りで、村じゅうの死人を埋葬する場所であつた。古い土まんじゅうは低く、新しい土まんじゅうは高かつた。林立した塔婆の上を、傘状に枝を張った百日紅さるすべりが、褐色の主幹をくねらせて、いくつもの土まんじゅうを

被い、このあたり花の咲く八月から十月までは、桃いろにかすんでいる。

私は次男だったから、生れた時は兄と父母と祖母がいて、幼少時の家中のどの記憶の中でも鮮明なのは祖母であった。両眼ともつぶれた祖母は、いつも私たちのまわりにいた。

祖母はいしという名で、上ん町の作左エ門の次女で、けこあんの家へ嫁してきたのは十六歳だったときいた。木樵りの夫（私には祖父）は年じゅう山へ出ていたので、眼がみえた頃は小作田へ出たが、二十六歳の時に表のたたきで小豆を干して石につまずき、前のめりに倒れた際、小豆のガラで左眼をつき、放ったらかしておいたのがもとで、一と月ほどしてつぶれた。一年後に右眼も共病^{ともや}みして、父をうんだ年は全盲だった。祖母は見えぬ眼で父をうみ、そのあと次男をうみ、先にうんでいた長女とあわせて三人を育てた。父のはなしだと、高声でよくしゃべり、針仕事も、洗濯も出来、明るい気性だったという。私がうまれた時は、叔父にあたる貞三（次男）叔母にあたるまん（長女）はもう家にいなかった。まんは駅ふたつ向うの小浜町の桶屋へ嫁し、貞三は駅のある本

郷で、みかん水売りをしていた。父は長男だから、家にのこって盲母の面倒をみたわけで、祖父が山へ出ていた幼少時は、祖母に背負われて大きくなったとみてよい。私らの母が、父のところへ上ん町から嫁したのは、祖父がコレラ蔓延で死亡した年で、父が二十七歳、母が十七歳だったというから、暦を繰ってみると、大正四年のことである。

私が生まれた大正八年には、祖母は六十九で、家仕事や村あるきをしていた。父は大工仕事で外へ出るし、母は小作田へゆく。家の中は、私と兄と祖母の三人きりで、これもたぶん三歳頃の思い出にちがいないが、居間のぐるりは竿がつるされ、ボロがいっぱいかけてあった。ボロは父と母の野良着やよそゆきの着物などで、その上に、兄と私の衣類もかかっていた。一家じゅうの春夏秋冬の衣類もつがそこにあった。全盲でも見わけがつくようにされていたのだろう。祖母は、このボロのあいだから這ってきた。寢所は独立した納戸だったが、ボロの下をくぐってこないと出入りできない。世の中を見たはじめのけしきは、たぶん、母の乳房や胸のあたりであるはずだけれど、どういうわけか、東の破れ

障子からさしこんでくる橙色の朝陽で、ボロがけものみたいに浮いてみえる中を、祖母が白髪頭を振って這い出してくる姿であった。祖母は私らに飯を喰わせたあと、私を背負い、兄の手をひき、村歩きへつれていった。

村歩きというのは、村をふれ歩く意で、いまでいう村小使いである。区長の家は斎藤六右エ門という素封家で、上ん町と下ん町しもじよの境界にあたる部落の中央にあったが、そこまで約半町ほどであった。私が二つの時は兄は四歳になっていたので、手びきは出来た。祖母は、父につくってもらった手垢のついた竹杖を前へさし出すようにつき、石ころ道をゆっくり歩いた。区長の家の人は毎朝、私たちがゆくのを待っていて、「ばばん、今日は衛生掃除やでエ」「ばばん、今日は兵隊さんの入営日やでエ」「ばばん、今日はどここの葬式やでエ」といったぐあいに用事を依頼した。ばばんというのは、婆あという意で、部落の誰もが、祖母のことをいしさん、いしばあさんなどとよばずに、ただ、ばばんとよんでいる。時には「六左のばばん」ともよぶことがあった。六左というのはうちの家号で、六左エ門という。祖母は、村道の勝手をよく知っていた。私は

背中において、祖母のくわいみたいに結んだ髷が、固油で光っていたのをおぼえている。時にはこの小さな髷に、嫁入り時にもってきたカンザシをさしていたが、真鍮製のその先端には耳かきがついていた。部落は上ん町、中ん町、左ん町、下ん町に分れていた。上三つの谷から洗い川が流れていたもので、岸には各戸の「かわど」が切つてある。川べりを歩くと落ちるので、祖母は反対側の生垣や土蔵や小屋の腰板に手をついて行つた。ナメコ板の塀だと、パラパラ音がしたので、家の中からふれごとをきいてくれる親切な家もあった。祖母は高声で、塀ごしに、ふれた。すると、「あい、わかつたでよう。ばばん、ええ天氣やで氣イつけてゆかいよう」と塀の向うから返事があつた。祖母は、「ええ天氣やで、お前らも働かいよう」といって、そこをはなれた。川に架つた小橋をわたらねば門口へつかぬ家も三十戸はあつた。小橋はみな木製なので、古びたのは苔がはえてへりに柵もない。雨の日や雪の日はよくすべつた。手びきの兄も、背中で道びきする私も、子供なりに緊張がおそい、真剣で誘導していたはずだが、そのような雪の日雨の日の記憶はあまりなくて、世の中はいつも晴れ

ていたのも不思議だ。

この祖母の村あるきについては、もうすこし記憶の断片をたどって述べてみたいのだが、わき道へそれるので控える。じつは、村あるきで道びきした頃、ふれごとの大半が、死人の通知だったことを言いたかった。なぜ、幼少時に、六十三戸の村であれほど死人が出たのだろう。記録をみるとコレラやチブスがしょっちゅう流行っていて、多い時は部落で一年で三十人もの死者がでているが、肺結核の蔓延も恐怖だったらしい。いまは町村合併で大飯町と改称された部落の役場が発行する『大飯町史』を繙くと、「大正初期頃から万年床廃止、窓明け運動など実施するも、結核は死亡率に於て王座を占め、目立ったのは若くして倒れてゆく男女だった。本県は有名結核県で、死亡率では全国の第三―四位にあり、原因は色々あったが、工場労働者を多く送りだしていて、それも青少年労働者が多かったためと思われる」とある。結核の予防が、窓明け運動や、万年床廃止で済まされていた。

村あるきする家々の約半数に結核患者はいた。女子の場合は木之本、長浜、

綾部などへ糸繰り女工として出ていた者、男子の場合は、京都、大阪の染色工場へ出て、みな結核にかかって帰郷した者であった。大正初期に地方労働者が、都会で味わった悲惨な労働事情は、丹後山田に生れた細井和喜藏の『女工哀史』でつまびらかである。部落約半数の家々にみられた帰郷者は、短かくて半年、長くて二、三年の療養後に死亡した。祖母の村あるきが、葬式のふればかりに思えたのも無理はない。私らがゆくと病人は納戸の北向き窓から青い顔をだしていた。あるいは家の外に建てた掘立小舎の小便桶をおいた戸口から戸を少しあけて覗いていた。伝染する病氣だから、一本の川で茶碗を洗うしきたりの部落の家々へ氣がねしながら、医者へもかけず万年床での死を待たせる家の者は、たいがい、病人に留守させ、田仕事へ出ている。祖母が死人の出たのをふれ歩く際、健康者はまずおらず、病人が応対に出たのもそのためだ。幸いなことに祖母はめくらだから、聞いてくれた者が、病人であるのに氣づかなかった。私や手びきした兄だけが、それを見ていた。五歳までの記憶だからはっきりしないが、ただ、人が死んだ場合のふれごととは二どあって、祖母はどんな

に天候がわるくても、村じゅう六十三戸を二どまわりした。一つは穴掘り当番の通知である。一つは葬式の日取りである。もちろん、上ん町の奥の高台の西安寺へ一番に行つた。和尚に、枕経やその他の読経をたのんだあと、村じゅうふれて家へもどつたが、部落の埋葬地は、すぐ近くのけこあんだつたので、家からすぐ見えるさんまい谷は、野辺送りの終点である。私たちはその翌日に眼のみえぬ祖母と障子をあけて長い葬列をみていた。

二

部落の菩提寺は禅宗臨済派で、詳記しておく、大本山相国寺派三等地西安寺、という。庫裡と本堂が一と棟になった茅ぶき屋根の建物だったが、村の奥の中腹台地にあつて、ここの和尚が死人の処置の総指揮をとつた。先ず、死人が出た家は区長へ走り、区長は村あるきに告げ、死亡届は役場（駅のある本郷

村へ家の者が走った。村あるきは、西安寺の石段をのぼり、和尚がおればじかに不在の場合は細君に、どこその誰が死んだと告げ、和尚は死者の枕もとへきて経をあげる。家の者は神棚や床の間に白紙を貼り、服忌中神事を行わないことを表示して待っていた。死人は北向けに臥かされていたが、たいがい敷蒲団の上で、そのよこに小机がおかれ、一本花と水米が供えてあった。かんな枕経がすむと、家の者らは死人をゆかんさせた。大盥おおだらいぬるまゆに微温湯を入れ、死人をよく洗ったあと剃髪した。男も女も丸坊主にしてしまったのだが、剃刃をもつのは戸長で、もし戸長が死人の場合は、長男、親族の者がやった。ゆかんがすむと、死人に白衣、白の経帷子きようかたびらを着せ、白脚絆白足袋、新しい草履の鼻緒に白紙をまいてはかせ、首には頭陀袋をかけ、額に「額あて」とよぶ卍字を書いた三角型の白布をまいた。頭陀袋の中は、念珠、銭六文（いまは適当な硬貨）、愛用品、日用品などを入れ、頭には小さい笠をかぶらせ、手には青竹の杖をもたせた。この杖は、青竹にかぎられており、三つ節に切り、先端を白紙でまいて荒茅でくくっておかねばならなかった。棺はたて棺と寝棺があったが、

納め方は家の者が抱え入れ、フタはせず、死体の周囲へボロ、雑物などつめ、死体がうごかぬようにした。この納棺も、前記のゆかんの途中も、香をたいて家じゅうくすべ、手のあいた者は、鉦をならしてわきで念仏をとなえた。納棺がすむと、「かりもがり」とよぶ部屋へ置いた。「かりもがり」とはどんな字を書くかいまも知らぬが、たいがい奥座敷があてられており、まわりに枕屏風をさかさに立て、死人が好んだ衣服をひとそろえかけておく。正面には机がすえられ、膳に玄米ダンゴ、玄米飯、味噌、水を供え、飯の中央に四花がたててあった。四花とは三寸ぐらいに切った竹串の先に、細い白紙をこまかくぎざんだものをさした旗で、四本あったからそう呼んだものだろう。机には一本花を供え、線香と蠟燭の火は絶やさないようにした。魔よけとして、刀、ナタ、カマなどの一つを棺の前におく家もあった。通夜はこの「かりもがり」で行なわれ、近親者が、三十三所念仏を唱えた。詠み巧者よこしやの者が上の句を詠むとあとがつけて上の句と下の句を詠んだ。「第一番那智山青岸渡寺、ふだらくや岸うつなみは三熊野的那智のおやまにひびく漣つせ」「第三番かざらぎ山粉河寺、ちちは